

タイトル：心をつなぐ二輪の花

学校名・学年：関西創価中学校・2年

名前：武田 佳代子

(本文)

赤、オレンジ、ピンク、紫色のカラフルな毛糸。その中央には、青く光るビーズが一つ。二輪の花を結ぶ折り紙の包みには、大きく「ありがとう」と書かれていた。

これは、私が一年生の冬、近所の支援学校との交流会でいただいた宝物だ。

支援学校には、体が不自由な人や、うまく話すことが難しい人など、様々な人が通っている。私たちの学校では、一年に一度、その生徒さんたちと交流会を行っている。私はその冬、初めて参加することになった。

企画担当になった私は、「どうすれば、参加したみんなに楽しんでもらえるか」を班で何度も話し合った。みんな積極的に考え、様々な考えが出された。

「まずはお互いを知ることから始まるよね。自己紹介タイムは欠かせないね。」

「ダンスでサプライズ登場したら、盛り上がって雰囲気が良くなるんじゃないかな。」

「ボッチャというゲームは、障がいのあるなしにかかわらず楽しめるものらしいよ。」

わいわい言いながら相談は進み、折り鶴の贈り物もすることに決まった。役割分担も決まり、準備が本格的に始まった。

交流会の説明動画を作る班、心を込めて折り鶴を作る班、ダンスの振り付けを練習する班。それぞれが協力し合いながら、交流会に向けて力を合わせた。

そして迎えた当日。会場の体育館に着くと、私たちは大きなカーテンの裏に集まり、息をひそめてサプライズダンスの出番を待った。

司会の先生の合図でカーテンが開く。私たちが飛び出すと、驚きと笑顔が一気に広がった。音楽に合わせて手拍子をし、ステップを踏むうちに、緊張は喜びの歓声へと変わっていった。

自己紹介では、

「同じ名前だね」

「同じアニメが一緒だ！」

と笑顔がはじけた。支援学校では、一人の生徒に一人の先生がつき、その子の好きなことや得意なことを教えてくださった。暑いのが苦手な子、近づいてじっと目を見つめてコミュニケーションをとる子、大きな声を出して笑う子。一人一人の個性を紹介してもらう中で、心の距離がぐっと縮まった。

次はボッチャ。白い「ジャックボール」に近づけたチームのボールが得点になる。私は車椅子の男の子とペアになり、長い筒を使って投げる方法を選んだ。

「どこに転がそうか？」と相談し、「せーの！」で一緒に手を放す。ボールは真っすぐ進み、相手のボールをはじいてジャックボールのそばに止まった。周囲から「うまくいったね！」と声が飛んだ。男の子は満面の笑顔。うまく言葉は出なくても「やったね！」と喜ん

でいる気持ちが伝わってきた。その後も好投が続き、私たちのチームは勝利した。

試合後、全員で作った折り鶴をプレゼントすると、みんなとても喜んでくれた。全員で集まって記念撮影をする時、一人の先生が担当の子の背中をずっとさすっておられた。その先生は「こうしてさすってあげると、安心して力が抜けるんだよ」と教えてくださった。私たちも、声を掛けながら、そっと背中をさすった。すると、その子の表情が和らぎ、心が通じたように感じた。

この交流会を通して、私は「心と心がつながる大切さ」を学んだ。話すことや動くことに不自由があったとしても、相手を知ろうとする気持ちと、違いを理解し受け入れる温かさがあれば、心は自在につながることが出来る。

あの日いただいた二輪の花は、今も私の机に飾ってある。花と花を結ぶ毛糸は、私たちの心をつないでくれた証だ。あの笑顔の心の花の輪を、これからも日本中、そして世界中へ広げていきたい。